

○第 184 回東海精神神経学会

日時：2026 年 1 月 25 日

会場：三重大学医学部総合医学教育棟臨床第 3 講義室

会長：岡田元宏（三重大学医学部附属病院精神科神経科）

1. 過度な跳躍行動に起因する足底部潰瘍を呈した小児期神経性やせ症女児例に対する家族協働アプローチ

……伊藤 泰¹⁾，玉山侑志^{1,2)}，加藤秀一¹⁾，池田匡志¹⁾（1）名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科，
2）医療法人成精会刈谷病院）

2017 年に改訂版が公開された英国の摂食障害の治療に関する NICE ガイドラインでは、家族との連携の重要性が明記された。今回われわれは、前医から合わせて計 10 ヶ月の入院加療を要した神経性やせ症の 10 歳代前半女児症例を経験した。跳躍し続けるといった過活動を認め、顕著な下腿浮腫、潰瘍もみられたが、隔離、拘束は行わず治療し、体重増加を認めた。成人と比べて小児では家族との連携が特に重要であり、発症早期の児童青年期の神経性やせ症に対してエビデンスのある Family-Based Treatment (FBT) においては、家族が体重回復の責任を担い、治療初期には家族が食事の管理をすることとなっている。本症例では、FBT における治療の枠組みを意識して家族への心理教育を行い、家族と連携をしたことで良好な転機を辿った。児童青年期の摂食障害の治療における家族との連携の重要性を考えるうえで示唆に富む症例であり報告した。なお、発表に際し、オープンアクセスも含め、本人および保護者に同意を得て、個人情報保護に配慮した。

2. 長期経過の制限型神経性やせ症患者の 1 例

……羽瀨知可子¹⁾，名和佳弘²⁾（1）愛知県精神医療センター，
2）名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科）

神経性やせ症（anorexia nervosa：AN）は、その死亡率の高さなどから医療機関が対応に苦慮する。今回単科精神科病院である愛知県精神医療センター（以下、当院）で行った長期経過 AN 患者における医療連携と治療の工夫を報告した。症例は現在 30 歳代前半女性。X-21 年頃（小学生時）に制限型 AN を発症し A 大学病院に長期（約 3 年）入院。X-18 年退院し当院

で外来治療を継続しながら、医療系専門学校に進学・卒業し、その後就職したが、2 年目に再発し退職した。薬剤調整、電気けいれん療法も無効で、A 大学病院に再度転院。X-2 年頻回の自殺企図のため再度当院に転院。在宅診療による身体管理を導入し、身体緊急時は A 大学病院および B 総合病院で対応。精神面では心理社会的治療および精神障害の外在化を図り、現在は経口摂取も可能となった。本症例では各医療機関の役割を明確化し連携を図ることが経過に好影響を与えたと考えられた。本報告は個人情報保護に留意し、オープンアクセスも含め、本人および家族から書面にて同意を得た。

3. 入院加療中に精神病症状を呈した神経性やせ症の 1 例

……中原茉保，蔵満彩結実（岐阜大学医学部附属病院精神科）

症例は 30 歳代女性。10 歳代よりダイエットを開始し、X-13 年に体重 22 kg（BMI 8.9）で当初初診、以後入退院を繰り返した。X 年 8 月、体重 24 kg（BMI 9.8）で任意入院し、食事療法と行動制限表による治療を開始した。入院 3 週目頃、過去にトラブルのあった他患者との接触を契機に「自分のことを噂されている」との被害念慮を生じ、次第に「病院をジャックされている、両親が殺される」との幻覚妄想状態となり、入院 4 週目に医療保護入院へ変更した。各種検査で器質的異常を認めず、急性一過性精神病性障害の併存が疑われた。QT 延長のため抗精神病薬は使用せず、経管栄養による安定した栄養管理を行い、約 1 ヶ月で精神症状は寛解した。本症例は、神経性やせ症においても極度の低栄養状態に心理的ストレスが加わることで急性精神病性症状が誘発されうることを示唆している。本症例の報告にあたり、オープンアクセスも含め、患者から同意を得て、匿名性に配慮した。

受付日：2026 年 1 月 30 日

受理日：2026 年 2 月 26 日

doi：10.57369/pnj.26-102

4. 幻覚を伴った神経性やせ症、むちゃ食い・排出型の1例

……………木村照平，立花昌子，池田匡志（名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科）

症例は30歳代女性。妊娠を契機に神経性やせ性（AN）を発症し、約2年で摂食制限型からむちゃ食い・排出型に移行した。発症初期より「デブ、死んじゃえ」など、身体像の障害に関連した自己批判的な声が持続し、幻聴であることは認識していたが、食関連行動は強化された。入院後には体重増加に伴い、身体の特定位や高カロリー食に黒い粒がまわりつく幻視も出現した。適用外の旨を説明し同意を得て抗精神病薬を使用した。次第に幻覚は軽減したが退院時に残存し、その後自宅療養で幻視は消失、幻聴も日常生活に支障のない水準に落ち着いた。ANでは特有の幻聴体験AN voiceが報告されている。本症例は、低体重・身体像の障害との関連は既報と共通するものの、治療負荷以前から幻聴が慢性的に存在し、幻視も併発した点で特異であり、統合失調症など精神障害との鑑別を慎重に行った。発表にあたり、オープンアクセスも含め、本人に文書同意を得て、個人情報保護に配慮した。

5. 自閉スペクトラム症を併存する回避・制限性食物摂取症に対し、トークンエコノミー法を含む介入が奏功した1例

……………後藤俊宏，青山美紗子，亀野陽亮，竹林淳和，和久田智靖，山末英典（浜松医科大学精神医学講座）

自閉スペクトラム症と嘔吐恐怖型の回避・制限性食物摂取症の併存症例に対し、トークンエコノミー法などによる介入が奏功した症例を経験したので報告した。症例は10歳代男児で、感覚過敏とこだわりの強さから、元来白米や乳製品などの食品拒否がみられた。ゲーム大会に敗退した日に食事を嘔吐したことから固形物摂取が困難となり、食事を全く摂れなくなり入院となった。入院後はオランザピンの投与により嘔吐への不安を軽減し、興味のあるゲームに即したトークンで摂食への動機づけを行った。固形物導入時には本人が試食し、味覚や食感に合ったものを選ぶなど、特性に配慮した。その結果、食事摂取量は増加し、病前体重まで回復した。発表では、本疾患に対するトークンエコノミー法の有効性について文献的考察を加えた。薬剤の適用外使用および本報告の作成にあたっては、本人・保護者に説明し、オープンアクセスも含め、同意を得た。個人情報にも十分配慮した。

6. 著明な肝障害が栄養療法で改善して退院に至った神経性やせ症の1例

……………芦田亜由夢，横倉正倫，橘 亜美，山口潔乃，金高沙織，山末英典（浜松医科大学精神医学講座）

症例は10歳代前半の女性。X-1年8月（BMI 26, 62 kg）、「太っている」と感じて食事制限を始めた。同年12月、無月経で近医婦人科を受診して体重増加を指示された（BMI 19, 46 kg）。低体重が続く、X年3月下旬に当科初診となった（BMI 13, 31 kg）。肥満恐怖に加え、著明な肝障害（AST 4,449 U/L, ALT 5,809 U/L, ビリルビン 9.50 mg/dL）を認めて同日当科入院となった。肝臓内科と連携し、栄養療法でX年6月初旬にBMI 16（39.2 kg）となり肝障害は改善した（AST 23 U/L, ALT 25 U/L, ビリルビン 1.2 mg/dL）。その後、肥満恐怖も改善して同月中旬に退院となった（BMI 17, 41 kg）。演題登録時点でもBMI 20（49.6 kg）で安定して通院している。オープンアクセスも含め、本人と保護者から同意を得て個人情報に配慮し、低栄養による肝障害に関して文献的考察を加えて発表した。

7. 自殺対策におけるSNS相談若年利用者の特徴 ——「あいちこころのサポート相談」「あいちこども相談」利用者データより——

……………日向 彩¹⁾，藤城 聡²⁾（1）愛知県精神医療センター，2）愛知県精神保健福祉センター）

日本の自殺者数は近年全体として減少傾向にあるが、子どもの自殺は増加しており、小中高生の自殺者数は2024年に529人と過去最多となった。愛知県にはSNSを用いたチャット形式の相談窓口「あいちこころのサポート相談」、小中学生を対象とした「あいちこども相談」が設けられている。本研究は、自殺対策におけるSNS相談の若年利用者の特徴を解明することを目的とした。のべ26,102件の相談を解析対象とし、調査項目は、性別、年齢、相談内容とした。「あいちこころのサポート相談」の19歳以下の利用者と、「あいちこども相談」の利用者人数を合算すると、女性は2021年度から漸増傾向、男性は2021年度から2022年度にかけて著減、以後横ばいだった。本研究は、委託先事業者から匿名加工情報として提供されたデータを用いており、個人情報の特定は不可能である。このため「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」の適用対象外であるため、倫理審査の対象とならないと判断した。

8. 統合失調症患者における二次性カルニチン欠乏症——歩行障害を契機に診断された3症例——

……岡村 聡（医療法人成精会刈谷病院）

本誌オープンアクセスに関する規程により、抄録掲載なし

9. クロザピン導入早期に腸閉塞を発症し、嘔吐物により窒息死した治療抵抗性統合失調症の1例

……玉山侑志（医療法人成精会刈谷病院）

治療抵抗性統合失調症の治療薬であるクロザピンは、新規導入数が保険算定上の評価基準に追加されるなど、国により普及促進されている。クロザピン導入早期に腸閉塞を発症し、嘔吐物により窒息死した治療抵抗性統合失調症を経験したので報告した。症例は70歳代女性。X-59年に統合失調症と診断され、X-46年より長期入院し種々の抗精神病薬による薬剤調整を行ったが、効果は不十分であった。X年1月、クロザピンを投与開始し、精神症状は一部改善した。クロザピン投与27日目（175 mg/日）、大量の下痢と嘔吐があり、腸閉塞が疑われた。血圧低下を認めたため同日中に総合病院に転院搬送したが、到着後すぐに嘔吐物により窒息死した。クロザピンの副作用としてクロザピン誘発性消化管運動低下（CIGH）が報告されており、生命を脅かす状態に進行するリスクがある。なお、発表にあたり、オープンアクセスも含め、遺族の同意および院内倫理委員会の承認を得ており、個人情報保護に配慮した。

10. アリピプラゾール持続性注射剤により寛解を維持できた統合失調症の治療経験

……瀬戸川雅裕、藤城弘樹、木村宏之、池田匡志（名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科）

統合失調症患者のうち、服薬アドヒアランスが不良な群については、経口製剤に対する持続性注射剤（LAI）の有効性が示されている。アリピプラゾール（APZ）-LAIを導入し、寛解を維持できた自験例について報告した。症例は40歳代女性で、幻聴や思考吹入、「電磁波攻撃による咽頭違和感」で救急要請を繰り返し、X年に当院へ紹介された。初診時、病識はなく幻覚妄想状態であり、母親の同意のもと、医療保護入院とした。APZ経口製剤による治療を開始したことで、精神症状は改善し病識の獲得に至った。患者はX-16年に当科受診歴があったものの、通院を自己中断しており、退院後のアドヒアランス不良が予想されたため、入院中にAPZ-LAIを導入した。退院後もAPZ-LAI単剤による治療を継続し、症状の再燃なく、A型作業所に通所できている。なお、発表に際しては、オープンアクセスも含め、本人の同意を得て、個人情報保護に配慮した。

11. 統合失調症治療における第2世代抗精神病薬持続性注射剤（LAI）導入例の6年転帰

……渡辺 俊、岸本果奈美、井上礼香、能登路拓哉、福原啓史、森本 宇、篠原北斗、小田理史（公益財団法人復興会鷹岡病院）

当院では以前より第2世代抗精神病薬持続性注射剤（LAI）の有用性を高く評価しており、多くの統合失調症患者に導入している。近年国内でも徐々に有用性が評価されつつあり、積極的に導入している施設は増加傾向とはいえ、依然副作用の懸念やスティグマなどを理由に導入実績がほとんどない施設が多くあることも事実である。当院では以前よりLAIの治療効果を評価しているが、このたびLAI導入後の6年転帰を調査、解析したので報告した。導入例は計119例であり、継続率において各薬剤間で有意差を認めなかった。臨床的全般改善度（CGI-S）は導入時と比し72ヵ月にわたって有意に改善した状態が維持されていた。社会的職業的機能評定尺度（SOFAS）に関しても同様の結果であった。LAI導入後の無就労率は72ヵ月にわたって減少していた。LAI導入後72ヵ月にわたって治療効果の維持および社会的職業的機能の向上が示された結果となった。なお、本報告は当院倫理委員会の承認を得て行い、個人情報保護に十分配慮した。

12. 深刻な自傷行為を伴う治療抵抗性統合失調症患者にクロザピンが奏効した1例

……平田彰太郎¹⁾、坂田晴耶²⁾、村橋賢祐¹⁾、吉田 優¹⁾（1）

公益社団法人岐阜病院、2）愛知県精神医療センター）

統合失調症患者は時に幻聴に行動を左右され深刻な自傷を行うことがある。特に治療抵抗性である場合、対応に苦慮する。クロザピンの導入で自傷行為が消失した症例を経験した。症例は30歳代女性で、高校生の時から被注察感や衝動行為があった。X-5年に精神科を受診し統合失調症と診断され、11回の入退院の後、X年7月に当院へ転院した。幻聴や滅裂な言動が目立ち抗精神病薬を主剤とした薬物療法を実施したが反応せず治療抵抗性統合失調症であった。患者や家族から同意が得られず、クロザピンの導入に至らなかった。X+2年12月に幻聴に影響されて右眼球を自ら鉛筆で刺して外眼筋を損傷し、他院眼科で手術を行った。これを契機に治療を受け入れた患者と家族から同意を得て、X+3年3月にクロザピンを開始した。治療は奏効し自傷行為は消失し、退院に至った。本症例の提示に際して、オープンアクセスも含め、患者の同意を得たうえで個人情報保護に十分配慮した。

13. 全身性エリテマトーデス・ループス腎炎の治療中に発症したステロイド誘発性精神障害

………伊藤 奨, 木村大樹, 岡田真典, 池田匡志 (名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科)

全身性エリテマトーデス (SLE) 加療中の精神症状は, 神経精神ループス (NPSLE) とステロイド誘発性精神障害 (CIPD) が鑑別に挙がり, 両者の治療方針は相反するため鑑別が重要である。症例は産後に SLE と診断された 30 歳代女性。ループス腎炎に対してプレドニゾロン (PSL) 60 mg が開始され, 約 2 週後より強い焦燥と希死念慮が出現した。PSL 減量後も症状は遷延し, 当科入院となった。自己抗体検査, 頭部 MRI, 髄液検査から NPSLE やその他器質的疾患を示唆する所見は認めなかった。焦燥感と希死念慮が併存する混合症状が主体であり, 発症が PSL 開始後約 2 週間であったことから, CIPD が最も考えられた。PSL を減量, 抗精神病薬を開始したところ希死念慮は早期に改善したが, 焦燥感は持続し抗精神病薬の変薬を要した。なお, 薬剤の適用外使用と本発表, オープンアクセスに関して本人に説明し, 同意を得て個人情報保護に配慮した。

14. 子宮頸がん術後に異所性 ACTH 産生腫瘍による精神病症状を呈した 1 例

………藤野淳也^{1,2)}, 岩田邦幸¹⁾, 池田匡志¹⁾ (1) 名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科, 2) 国立病院機構東尾張病院)

Cushing 症候群の精神症状として, 急性に高コルチゾール血症が出現した場合には躁状態や焦燥を呈しやすい。症例は 30 歳代女性, X-1 年 4 月に A 病院婦人科にて子宮頸がんに対する広汎子宮頸部摘出術を受け, 術後は化学療法を継続していた。X 年 11 月, 「癌は完治した」「この治療でノーベル賞が取れる」と妄想に左右され化学療法を拒否し当科に紹介, 精査目的に入院となった。入院後は一貫して「感謝, 感謝」と多幸的であり, リスペリドンへの反応性も不良だった。低 K 血症の精査にて高コルチゾール/高 ACTH 血症が指摘され, 小細胞神経内分泌癌を含む組織型であったことをふまえ, 異所性 ACTH 産生症候群と診断した。メチラポン内服による抗コルチゾール療法を実施したところ, 速やかに精神病症状は寛解した。担癌患者の初発の精神病症状の治療には, その組織型もふまえた鑑別診断が重要となる。なお, 本発表に際しては, オープンアクセスも含め, 本人および家族から同意を得たうえで, 個人情報保護に配慮した。

15. 術後せん妄の発症後にレビー小体病による軽度認知障害 (MCI-LB) と診断された 1 例

………久留宮千賀¹⁾, 立花昌子¹⁾, 岩田邦幸¹⁾, 藤城弘樹²⁾, 池田匡志¹⁾ (1) 名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科, 2) 名古屋大学大学院精神医学寄附講座)

症例は 70 歳代男性。食道がん術後に不眠, 幻視, 注意の障害, 意識水準の変動, 失見当識が出現した。術後せん妄として対症療法を行い, 数日後には注意の障害, 失見当識の改善が得られた。しかし, その後も幻視は持続し, 自宅退院に向けて経腸栄養の自己管理が始まったが, 記憶力は低下しており手技が覚えられなかった。術後 18 日目にも幻視は改善せず, 器質的精査を行うこととなった。脳血流 SPECT で後頭葉から頭頂葉における血流低下, MIBG 心筋シンチグラフィで取り込み低下を認めた。術後 32 日目に幻視の改善が確認されたが, 以降も軽度認知機能障害, 認知機能の変動は改善が得られず, MCI-LB として, 適用外使用の旨を説明し同意を得て, ドネペジルを開始した。当日は, せん妄発症を契機に診断に至った MCI-LB について文献的考察を含めて報告した。発表にあたり, オープンアクセスも含め, 本人の文書同意を得たうえで個人情報保護に最大限配慮した。

16. 双極性障害治療におけるアリピプラゾール持効性注射剤導入例の後方視的検討

………岸本果奈美, 渡辺 俊, 井上礼香, 能登路拓哉, 福原啓史, 森本 宇, 篠原北斗, 小田理史 (公益財団法人復康会鷹岡病院)

第 2 世代抗精神病薬持効性注射剤は統合失調症における有用性が明らかになりつつあるが, 双極性障害においてはアカシジアなどの副作用やスティグマ, うつ病相を誘発する懸念から使用が躊躇されることが多い。そこで双極性障害の維持期におけるアリピプラゾール持効性注射剤導入例について後方視的に検討した。対象は 14 例であり平均年齢 43.2 歳, 罹病期間 99.2 ヶ月であった。継続率は 78.6% であった。Clinical Global Impression for Bipolar Disorder (CGI-BP) スコアは導入後 1 ヶ月, 3 ヶ月, 6 ヶ月, 12 ヶ月において有意に改善した。アリピプラゾール内服群との比較においても, 導入群は 6 ヶ月および 12 ヶ月で有意な改善を認めた。さらに併用薬の用量や就労状況についても調査した。本研究は当院倫理委員会の承認を得て実施し, 個人情報の保護に十分配慮した。

17. 相貌失認、学習障害、注意欠如・多動症（ADHD）を併存する若年女性の職場適応が改善した1例

……河地利彦，加藤秀一，池田匡志（名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科）

神経発達症は複数の障害が併存することが多く，併存により社会的機能が低下する傾向がある．本症例は10歳代女性．幼少期より漢字習得の遅れや不注意が目立ち，中高では顔と名前的一致に著しい困難があり，識別できた同級生は3年間で2名のみであった．職場での人物識別困難や事務作業ミスを主訴に精神科を受診．ウェクスラー式成人知能検査第4版（WAIS-IV）でIQ89，言語理解81，注意欠如・多動性障害評価尺度（CAARS）で不注意傾向が顕著であった．20項目相貌失認尺度（PI20）は83点，標準高次視知覚検査 熟知相貌検査（VPTA-FFT）で命名・識別困難，改訂版標準読み書きスクリーニング検査（STRAW-R）で読字・書字能力の低下を認めた．相貌失認，限局性学習症，注意欠如・多動症（ADHD）と診断し，アトモキセチンを導入．障害開示と環境調整により職場適応が改善した．本症例は，複合的な神経発達症に対し，心理評価に基づく支援と環境調整が社会参加促進に有効であることを示唆した．発表に際し本人より，オープンアクセスも含め，同意を得て個人情報保護に配慮した．

18. 自閉スペクトラム症の二次障害である強迫症に対して発達障害患者向けのデイケアプログラムが有効であった1例

……大久保嘉哉，中村博充（のぞみの丘ホスピタル）

症例は40歳代男性．X-16年に，A病院にて強迫性障害と診断され，薬物療法，カウンセリングが開始された．以降複数の病院を転院するが強迫症状は改善しなかった．X-2年7月中旬夜間に不安・焦燥が強くなり当院を緊急受診．同日任意入院となった．強迫性障害と診断し，エスシタロプラムと，少量のリスペリドンを開始した．入院中に実施した心理検査では自閉スペクトラム症に類する特性の存在が示唆された．焦燥が改善したためX-2年9月中旬に退院し，外来通院に移行し，カウンセリングとデイケア利用を開始した．X-1年より発達障害患者向けのデイケアプログラムを受講し，同時期より強迫症状の頻度は低下した．現在はA型事業所での就労を目標としている．自閉スペクトラム症の二次障害として強迫症の頻度は高く，発達特性に対して疾患教育や適切な支援を行うことが治療上有効であると考えられた．なお，薬剤の適用外使用，発表に際し，オープンアクセスも含め，本人と家族から同意を取得し，個人情報保護に配慮した．

19. 若者自殺死亡率の経時的変化とハイリスク群の同定

……市川真太郎，松本龍介，岡田元宏（三重大学医学部附属病院精神科神経科）

日本の粗自殺死亡率（CMR）は2009年以降，一貫して減少したが，2010年代中頃から減少が鈍化し，特に30歳未満の若者世代は増加に転じていると報告されているが，ハイリスク群は明らかではない．2009～2024年の警察庁自殺統計を用い，性別/年齢層（20歳/20～29歳）/社会的地位（学生/就労者/失業者）別の月間CMRを導出し，ジョインポイント回帰を用いて自殺率の経時的変動を解析した．30歳未満女性のCMRはすべてのグループで2016年頃から増加しており，特に20歳未満女性の学生および就労者のCMRは2023年以降，男性の同グループを上回っていた．一方，30歳未満男性のCMRは学生および失業者で2016年から増加していた．また，学校別の解析データでは2022～2024年の定時制・通信制高校生のCMRが20歳未満の世代で最も高く，全日制高校生よりも男性で約2.5倍，女性で約5倍高かった．今後，増加し続ける若者の自殺対策には定時制・通信制高校への専門職種の人的投入が不可欠であると考えられた．

20. 当院における20年以上通院中の患者の各種特性について

……守田耕太郎，杉山（守田）かな（守田クリニック）

編集委員会の判断により抄録掲載なし

21. 精神症状で受診したのちにインスリノーマが判明した1例

……矢内るみな，久保桃子，藤田 潔（桶狭間病院藤田こころケアセンター精神科）

われわれは精神症状を呈したインスリノーマ例を経験した．症例は40歳代女性．X-4月より不眠，集中力減退，食欲低下のため近医を受診し睡眠薬が処方された．頭痛も出現しX-1月A病院脳神経内科を受診．器質的異常は否定されX月に当院を受診した．初診時，絶望的だと高揚した様子で訴え多弁，希死念慮，注察妄想を認めた．精神病症状を伴う双極性障害の混合状態と判断し医療保護入院となった．アリピプラゾールを開始したところ入院3日目には不眠は改善し食事摂取量も増加した．入院時採血で血糖53 mg/dLであり，再検査でも低血糖であったことから当院内科に併診を依頼した．内科医よりインスリノーマの可能性が指摘され退院後A病院内分泌内科に紹介され受診，精査の結果インスリノーマと診断された．X+4月に膵体尾部切除術が施行された．現在投薬なしで精神状態は安定している．なお，発表にあたり，オープンアクセスも含め，本人に同意を得て個人情報保護に配慮した．

22. エスシタロプラムにて薬剤性バソプレシン分泌過剰症 (SIADH) を発症した 1 例

……秋田航平, 鳥居洋太, 池田匡志 (名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科)

バソプレシン分泌過剰症 (SIADH) は薬剤により惹起されることがあり, 選択的セロトニン再取り込み阻害薬 (SSRI) も原因薬剤として知られている. 今回, エスシタロプラムによる SIADH の 1 例を経験した. 症例は 80 歳代女性, 反復性うつ病の既往があり過去にエスシタロプラムとミルタザピンによる治療歴を有した. X 年 Y 日に気分の落ち込みを主訴に受診しエスシタロプラムを再開したところ, Y+3 日に倦怠感と摂食不良が出現し救急搬送となった. 検査で低 Na 血症を認め SIADH と診断され, 内服中止と補正療法により改善した. その後はミルタザピンを再導入し副作用なく漸増. 症状は改善し退院した. 高齢女性におけるエスシタロプラム誘発 SIADH を経験したが, SSRI は高齢者におけるリスク因子であり抗うつ薬導入前後に注意が必要である. なお, 本症例発表にあたり本人よりオープンアクセスに関する項目を含め同意を文書で得たうえで個人情報保護に配慮した.

23. 熱中症と悪性症候群, 緊張病との鑑別を要した 1 例

……穂積健太, 岡 知加, 福山孝治, 岡田元宏 (三重大学医学部附属病院精神科神経科)

本誌オープンアクセスに関する規程により, 抄録掲載なし

24. パーキンソン病に伴う精神病症状に対してブレクスピプラゾールが有効であった 1 例

……橋本野々香, 和久田智靖, 中村佳夏, 兵藤 萌, 山末英典 (浜松医科大学精神医学講座)

パーキンソン病 (PD) に伴う精神病症状に対する抗精神病薬の使用は, 特に錐体外路症状の副作用が出現しやすく, 薬剤選択が限られる. 今回われわれは, ブレクスピプラゾール投与により, 顕著な副作用なく精神病症状が改善した 1 例を経験した. 症例は 50 歳代男性. X-5 年に PD を発症し, L-DOPA が開始された. X-2 年頃より「天井からノック音が聞こえる」という幻聴や, 「下からビリビリ伝わって嫌がらせされる」という被害妄想が出現した. X 年 3 月, 幻覚妄想の影響により自殺企図を起こしたため入院となった. 入院時, 糖尿病を合併しており, 認知症は認められなかった. L-DOPA を減量したが幻覚妄想の改善は得られず, 本人から保険適用外使用の同意を得て, ブレクスピプラゾールを開始し 2 mg まで漸増したところ, 幻覚妄想の改善が得られ, PD の悪化は認めず, 入院 73 日目に退院となった. なお, 発表に際して, オープンアクセスも含め, 本人の同意を得て個人情報に配慮した.

25. 前頭葉眼窩部損傷例に多面的アプローチが有効であった 1 例

……高木光希^{1,2)}, 仲秋秀太郎^{1,2)}, 原 秀吉¹⁾, 内田 恵^{1,2)}

(1) 楠倉メンタルホスピタル, 2) 名古屋市立大学大学院医学研究科精神・認知・行動医学)

本例は外傷により前頭葉眼窩部損傷が生じ行動障害を呈したが, 多面的アプローチを行い行動障害が改善したので報告した. 症例は 30 歳代男性. X-17 年にバイク走行中に自動車に追突後昏睡状態となり, その後易怒的となった. X-1 年から暴言, 器物破損のため X 年 1 月に当院に医療保護入院. 頭部 CT で両側前頭葉眼窩部に限局の脳挫傷を認めた. 入院後, 薬物療法, 心理教育, 作業療法, 認知行動療法などの多面的アプローチを行った. 易怒性や衝動性などの行動障害は改善. 入院初期と後期に遂行機能障害の質問紙を患者と家族に, Iowa Gambling Task (IGT) を患者に施行, 入院後期には質問紙の患者と家族間の得点解離が縮小し IGT も改善した. 学会当日は多面的アプローチの意義に関して考察した. 本症例の報告および本誌への掲載とオープンアクセスに関して本人および代諾者の同意を得て, 個人情報保護に十分配慮した.

26. プロナンセリン貼付剤が著効した前頭側頭型認知症の 1 例

……黒野瑛仁 (社会医療法人聖泉会聖十字病院)

本誌オープンアクセスに関する規程により, 抄録掲載なし

27. アルコール依存と認知機能低下を主訴に来院し入院後も認知症が残存した 1 例

……小林健一, 金 徳洙, 松田京介, 安田一貴, 奥田正英 (医療法人資生会八事病院)

当院のアルコール依存症入院プログラムには, 来院時に認知機能低下を伴う高齢患者が家族に連れられしばしば受診する. 患者にはアルコール酩酊あるいは離脱せん妄による意識障害が重なることがあり, 初診時に認知機能低下の主因がアルコールか器質性かの鑑別は難しい. このような場合, まずは非自発的入院にて鑑別的治療を行う. そして意識障害と認知機能低下に改善が得られた場合には, 改めて本人の治療意思を確認し, 自発的入院に切り替えて依存症プログラムを開始する. しかし実際には, アルコール依存にマスクされた認知症例も少なくなく, 認知症対応へ治療の焦点を移さざるを得ないことも多い. 今回, 80 歳代で運転免許返納を契機に飲酒量が増え依存状態となり入院し, その後も認知機能低下が残存した認知症症例を経験したので報告した. 症例報告にあたっては本人からは認知症のため同意取得ができず, 家族よりオープンアクセスに関する項目を含め同意を得たうえで, 個人情報保護に十分配慮した.

28. 術後1ヵ月以上経過した後にせん妄を発症した高齢男性の症例

………金 徳洙, 小林健一, 松田京介, 浅井隆之, 奥田正英 (医療法人資生会八事病院)

手術はせん妄の直接因子であり, 術後せん妄として知られているが, 一般的には手術から1週間以内に発症するとされる。われわれは, 術後1ヵ月以上経過し, 退院した後にせん妄となった症例を経験したので報告した。症例は80歳代の男性。胆管癌に対し開腹臍島十二指腸切除が行われた。術後経過は良好で手術から約1ヵ月後に退院した。しかし, その数日後に, 夜間に徘徊し帰宅できなくなるなどの症状が急激に出現した。せん妄として精神科での入院治療を行い, 1ヵ月ほどで精神症状はほぼ消失した。治療の過程でリスペリドン, オランザピン, メマンチンを, 本人, 家族へ説明し同意を得たうえで適用外使用した。今回は, 治療経過を振り返り, せん妄の経過や治療内容について考察を加え報告した。症例報告にあたっては本人および家族よりオープンアクセスに関することを含め文書で同意を得たうえで, 個人情報保護などの倫理的配慮に努めた。

29. トピラマートにより被害妄想・念慮の精神性副作用が生じた若年ミオクロニーてんかんの1例

………村松良一, 西田拓司 (国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター)

症例は10歳代女性。X-6年頃から起床後まもなくの両上肢のびくつきを自覚した。X-3年頃には起床後まもなく全身の強直間代けいれんがあり, 救急搬送され, 小児科にて若年ミオクロニーてんかと診断された。ラモトリギンが開始されたが, 週単位の両上肢のびくつきと月単位の強直間代けいれんが続いた。X-1年12月にトピラマートが開始されたところ, その2日後より被害妄想が出現した。X年2月に薬剤調整目的で入院しトピラマートを漸減中止したところ, 被害妄想・念慮は消失した。側頭葉てんかんなど辺縁系が関与するてんかんでは, 精神病症状が出現することがある一方で, 一部の抗てんかん発作薬は精神病症状を副作用として惹起することがある。本症例を通じててんかに伴う精神病の鑑別や対応について文献的考察を加えつつ報告した。発表に際して, オープンアクセスも含め, 患者と保護者に十分に説明をして書面で同意を得たうえで個人情報保護などの倫理的配慮に努めた。

30. 心因性非てんかん性発作 (Psychogenic Nonepileptic Seizures : PNES) の臨床像と長時間脳波の有用性

………布施川佑志郎, 西田拓司 (国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター)

2024年に当院を初診あるいは直接入院した成人患者653名 (年齢中央値28歳, 女性305名) を対象に, 心因性非てんかん性発作 (PNES) の臨床像と長時間脳波の有用性を調査した。診断はてんかんが436名 (67%), PNESのみが35名 (5%) だった。精神障害の併存は90名 (14%) であった。全体の入院率は39%だった。PNESのみおよびてんかとPNESの併存を合わせたPNES群49名は, 女性が34名 (69%), 精神障害併存は17名 (35%) と全体での割合より高率であった。PNES群の入院率は55%であり, 入院した27名のうち17名 (63%) で長時間脳波により発作を捕捉でき, 診断に有用であった。PNES群は精神障害の併存も多く, 診断には長時間脳波が有用であり, その後の治療において精神科との連携が重要であると考へた。本研究は院内倫理委員会の承認を得ており, 日本精神神経学会の倫理ガイドラインに則って行った。

31. 前駆期レビー小体型認知症 (DLB) が疑われる最遅発性統合失調症様精神病 (VLOSLP) の1例

………藤田 到^{1,2)}, 永野皓子^{1,2)}, 山本佳将^{1,2)}, 久納一輝²⁾, 芳野浩樹²⁾, 森川将行²⁾ (1) 三重大学医学部附属病院精神科神経科, 2) 三重県立こころ医療センター精神科)

症例は60歳代男性。X-2年3月に退職し, その後雇用された職場に適応できず, 抑うつ症状が生じた。近医内科で抗不安薬や睡眠薬が処方されるも奏効せず, X-1年5月からは近医精神科に通院するようになった。その後は小康状態で経過したが, X年9月からは落ち着きなく下半身裸になって家の周りを周回したり, 幻聴と対話する様子が見られるようになった。統合失調症の診断で抗精神病薬が処方されたが効果は乏しく, 家人の対応が困難となり同年11月当院入院となった。入院時は幻聴に聞き入る様子が見られ, 聞こえてくる命令に従って女性病室に立ち入ることもあった。抗精神病薬の調整で問題行動は見られなくなり, X+1年3月退院となった。脳血流シンチグラフィでは後部帯状回の集積は比較的保たれているものの側頭葉, 後頭葉, 頭頂葉で集積低下が目立ち, 精神症状優位型の前駆期DLB (DLB-psych) を疑った。本報告に際しては, オープンアクセスも含め, 本人および家族の同意を得たうえで個人情報の保護に十分配慮した。

32. うつ病治療経過中に非けいれん性てんかん重積状態となった1例

……田中周作，江崎幸生，北島剛司，岩田仲生（藤田医科大学医学部精神神経科学講座）

症例は海外出身の80歳代女性である。40歳頃から母国でうつ病の治療歴があり，日本移住後も近医で治療を継続していた。X-14日頃から被害妄想が出現し，疎通性の低下，左手を挙げる動作を認めた。内科病院でMRI検査などを行うが異常所見を認めず，X日に当院紹介となった。うつ病性昏迷を疑い治療を開始し，並行して器質的疾患の精査をしたところ，X+1日に脳波検査で全般性棘徐波を認め，非けいれん性てんかん重積と診断した。バルプロ酸ナトリウム投与で症状は消失した。非けいれん性てんかんの臨床所見は多彩で特異的な臨床所見の報告はない。本症例は，うつ病の既往はあったが，てんかんの既往がないこと，疎通が困難であったことなどから診断に苦慮した。精神科診療において，非けいれん性てんかん重積の頻度は少ないが，念頭におく必要がある。なお，症例報告にあたり患者個人が特定されないように配慮し，オープンアクセスも含め，本人および家族に同意を得た。

33. 当院における反復経頭蓋磁気刺激療法（rTMS）導入後の治療効果の検証

……藤本卓也¹⁾，廣田 悠¹⁾，坂田晴耶²⁾，村橋賢祐¹⁾，吉田優¹⁾（1）公益社団法人岐阜病院，2）愛知県精神医療センター）

本研究は2024年4月に当院で開始した反復経頭蓋磁気刺激療法（rTMS）の治療効果を検証したものである。対象者は当院でrTMSを施行した全患者（2025年7月まで）とした。後方視的研究として，人口統計学的背景，ハミルトンうつ病評価尺度（HAM-D）の改善などをアウトカムとして調査した。対象者はのべ19名で，女性10名（53%），年齢 35.7 ± 11.9 歳，治療前HAM-D 19.4 ± 4.8 点であった。治療後，寛解9名（47%），HAM-D改善率50%以上1名（5%），20~50%4名（21%），20%未満3名（16%），中止2名（11%），治療後HAM-Dは 11.9 ± 9.9 点であった。本研究は「TMS療法関連データベース・レジストリ構築およびレトロスペクティブ・データ解析に関する研究」の一環として，京都大学大学院医学系研究科・医学部及び医学部附属病院医の倫理委員会の承認を得て，個人情報保護に配慮して行われた。

34. 短期間のカタトニアを反復する双極症Ⅱ型の1例

……鈴木慶祐^{1,2)}，山本暢朋²⁾（1）三重大学医学部附属病院精神科神経科，2）独立行政法人国立病院機構神原病院精神科）

カタトニアは統合失調症に限らず，双極症を含む複数の精神障害で生じるとされる。比較的短期間のカタトニアを反復する，双極症Ⅱ型の症例を経験したので報告した。患者は40歳代の女性であり，X-26年に軽躁エピソードを呈し，以降は軽躁エピソードと抑うつエピソードを繰り返した。放火などの逸脱行動や自殺企図を行い，措置入院も含めた複数回の入院歴が存在する。X年12月に医療保護入院となったが，X+1年5月頃以降，昏迷・カタレプシー・無言症・反響言語や反響動作といった，カタトニアの症状が出現するようになった。カタトニアは数時間から1日程度で消失することが多いが，時には2週間程度にわたって持続することもみられた。身体検査所見に異常はなく，カタトニアは双極症Ⅱ型に伴うものと考えられた。症例報告にあたり，オープンアクセスも含め，患者本人から文書で同意を得て，個人情報の保護には十分配慮した。

35. 精神病性うつ病を背景に緊張病と極度の低栄養状態に至った50歳代女性

……鈴木勇之介，荒深周生，池田匡志（名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科）

症例は50歳代の女性。精神疾患の既往歴なし。X-1年11月にライフイベントを契機に徐々に抑うつ症状・自責感・不眠が出現し，同年12月より口腔内の違和感を理由に食事摂取量も徐々に減少した。X年1月からは全く食事を摂取しなくなり，脱水，および低栄養状態で総合病院内科に入院となった。経口摂取を拒む背景にはうつ病が疑われ，同月に当院精神科へ転院となった。初診時，抑うつ症状・精神病症状に加えて低栄養状態を認め，精神病性うつ病と診断し，栄養管理を行いながらミルタザピンを開始した。蠟屈・無言・拒絶が強く緊張病の合併を疑いロラゼパムを併用し改善が得られた。またミルタザピン増量により精神症状は消退し，身体状態も改善され約2ヵ月で退院となった。本発表では治療経過に文献考察を加え報告した。なお，本発表に際し，オープンアクセスも含め，患者本人へ説明を行い，同意を得たうえで，個人情報保護などの倫理的配慮を行った。

36. 感応精神病と思われる父親の存在によって治療に難渋した統合失調症の1例

……澤木亮太^{1,2)}，山本暢朋²⁾ (1) 三重大学医学部附属病院精神科神経科，2) 独立行政法人国立病院機構橿原病院精神科)

感応精神病は稀な精神障害であり，被暗示性の高い同居家族や集団などにみられることが多いとされる。患者は40歳代の男性であり，中等度知的発達症に加え，X-25年に統合失調症を発症し，長年にわたって警察官からの嫌がらせを受けているといった妄想を有していた。複数の抗精神病薬を十分量かつ十分期間投与されてきたが，妄想は強固で体系化しており，前記妄想に基づく逸脱行動が多く，措置入院も含めた複数回の入院歴が存在した。X年7月に措置入院となったものの，診察に同席した父親は「息子が警察に嫌がらせを受けた。警察が息子の人生を壊した」などと述べるなど，感応精神病に罹患していることが疑われた。患者は父親との交流を通し妄想を強化させ，治療に難渋した。二人を分離して生活させることが理想であるが，患者は自宅への帰往を希望した。症例報告にあたり，オープンアクセスも含め，患者本人から文書で同意を得て，個人情報の保護には十分配慮した。

37. 強迫症から周産期うつ病へ発展し医療保護入院中に分娩を行った1例

……浮洲龍英，蔵満彩結実（岐阜大学医学部附属病院精神科）
本誌オープンアクセスに関する規程により，抄録掲載なし

38. 産後9日目に混合状態となった産後精神病の1例

……横井かな子，荒深周生，池田匡志（名古屋大学医学部附属病院精神科・親と子どもの心療科）
本誌オープンアクセスに関する規程により，抄録掲載なし

【特別講演】妄想・統合失調症の臨床から研究，そしてまた臨床へ

……宮田 淳（愛知医科大学精神科学講座）
本誌オープンアクセスに関する規程により，抄録掲載なし